

## 報告

上から降ってくるサイエンスカフェから  
蜘蛛の巣構造の中のサイエンスカフェへ富田晃彦（和歌山大学\*<sup>1</sup>）、尾久土正己（和歌山大学\*<sup>2</sup>）\*<sup>1</sup>教育学部、宇宙教育研究所 \*<sup>2</sup>観光学部、学生自主創造科学センター、宇宙教育研究所

## 1. はじめに

この報告は、2010年11月20日に神戸大学で開かれた近畿支部会（全体の報告は、今号の成田直さんの記事を参照）での「釜ヶ崎から宇宙へ、宇宙から釜ヶ崎へ」セッションで、富田及び尾久土が発表した内容を簡単にまとめなおしたものです。

## 2. 釜ヶ崎、商店街、保育園、ホスピス

『天文教育』の読者のみなさんは、さまざまな形で日々、天文教育普及活動を実践されているでしょう。これは私たちも同じです。ここ数年を振り返ると、こちらの都合で出かけたという形のものより、先方に呼ばれて出かけたという形のものが増えてきました。人脈が広がってきた、だけでは説明がつかないと考えています。ここでは釜ヶ崎での例を中心に実践内容を簡単に報告しつつ、仮のものですが、我々の自己評価を記してみます。

## 2.1 釜ヶ崎

釜ヶ崎より愛隣（あいりん）地区と書いた方がピンとくる人が多いでしょう。大阪市西成区内にある、日本最大といわれる、日雇労働者の就労する場所（いわゆるドヤ街）のことです。尾久土が日本ボランティア学会2009年度夏の大会で講演した際、釜ヶ崎でNPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）や「カマン！メディアセンター」を主催し、活動されている上田假奈代氏に出会い、

活動現場に誘われたのがきっかけでした[1]。2009年の12月に尾久土が現地でトーク、そして年末に「三角公園（萩之茶屋南公園）」で観望会を持ちました。ここでのテーマは「釜ヶ崎の上にも同じく宇宙は広がっている」というものでした。2010年のメーデー前夜祭の観望会には、富田も参加しました。この時の話を以下に、少し詳しく紹介しましょう。頭の上に、誰にでも大自然があるぞ、というのは、富田が保育園回りをしている時の思いと同じものです[2]。最初は、宵の明星の金星、続いて土星、最後にアークトゥールスを望遠鏡で案内し、途中には、国際宇宙ステーションが明るい軌跡をえがいて通っていく幸運にも恵まれました。富田が感動したのは、参加者からのこんな声：「俺は嬉しいよ、みんなこんなに喜んで、それからみんな順番に並んで、ひとりひとり楽しんで、首が痛くなっても、みんなで上を見てね。宇宙はいいね。ここにいる奴、みんないい奴だよ。ここはいいとこだよ。」大変酒臭い“おっちゃんたち”に次々に抱きつかれ、お～れ～は～、うれし～、とわめかれたのでした。抱きつかれるのは保育園回りで慣れていますが、本当に同じくらいの肌と肌の近さ、です。しかも初対面で、です。大きな声で嬉しい声を上げた時、飛びついてきて体を力強くひっつけてきた時、保育園児であろうと、おっちゃんであろうと、それは本当に嬉しい時です。それから、みなさんの「おっっ」という声。そして、「順番に

並んで」には、実は、おっちゃんたちの強いメッセージが込められているのです。まず、この場所と仲間と今の時間が大好きで、自慢したいくらい気に入っている、ということ。同時に、それを評価せずにいる人（具体的には、十分取材しない、あるいは、取材しても偏見に満ちた解釈しかしない人たちや諸媒体）へのいらだち、です。この気持ちを、おっちゃんたちはたくさんの言葉を使って表現してきてくれました。その上で、この時空間のナマのいいところを伝えられて今日はよかった、嬉しかった、ということ表現されたのでした。私たちが宇宙を見せに行っただけでなく、三角公園に誘われて、素敵な時空間を見せてもらってきた、のでした。

釜ヶ崎での活動は、NPO 法人ココルームと尾久土の共同で続いていっています。こちらから何かを与える、ではなく、お互いがお互いから得るという関係を目指すのは、ココルームの目標でもある、と、上田さんの発表にありました。

## 2.2 商店街・保育園・ホスピス

2010年9月、大阪と和歌山をそれぞれ代表する商店街で開かれたサイエンスカフェに富田はお誘いを受けました。大阪では、理カフェ[3]というグループから、和歌山では、みんなの学校[4]という場所から誘われました。理カフェの空間は、私にとって驚きでした。サイエンスカフェは、第3期科学技術計画での科学コミュニケーター養成のかけ声に沿う面も持ちながら、2004年ころから全国的に始まりました。当初は、科学研究者を支える三角形の構造で、頂点を高くするため、また頂点を維持するために、裾野を広く、また裾野を維持する、という考え方もありました(図1参照)。

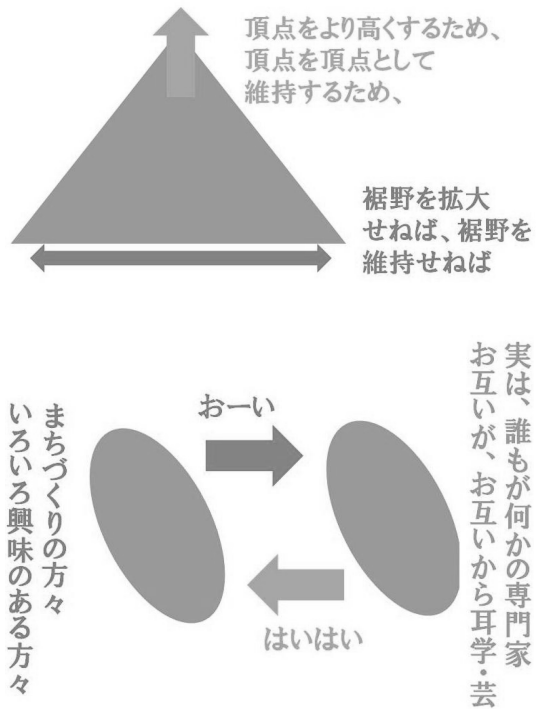


図1 我々が感じ取っている、サイエンスカフェなどの活動の変化の概念図

2004-2005年当初は上の図のように、三角形構造を念頭に置いていた面が強い。しかし近年は市民が「消化」し、下図のように横どうしで連携する形になっていったのではないかと考えている。近畿支部集会の発表では「上から降ってくる」から「横から熟議する」という題目で発表したが、2つの要素間の熟議というより、多要素がさまざまな結びつき方をするという、蜘蛛の巣構造と表現した方がいいと考え、この報告文内ではそのように書いた。

もちろん、多くの人はこの考えに違和感も持っていたでしょう。それはともかく、理カフェはまったく市民の方々による手作りのもので、三角形構造なるものは存在しようがありません。富田が興味を持ち、参加者に聞いて回ると、オタク文化が表に出る社会的背景

がある、あるいは、インターネットの定着で有志を短時間に多数集めることができる時代的背景がある、という意見をもらいました。富田が思うに、「上から降ってきた」サイエンスカフェという方法を、市民が消化して、「横どうしでやりとりする」ものに変えたのだと思います。ところでよく考えてみると、横どうしの連携は昔からあるわけです。天文分野ですと、教育普及の実践者、アマチュア天文家の活動は、質・量ともに大変な遺産として、今、私たちが享受していますし、現在も大変盛んに活動が続いています。他にも、天プラ[5]や黄華堂[6]、また星のソムリエ®[7]の多方面の活動など、多くの例があり、挙げることができません。そういう土壌の中に、サイエンスカフェという名前（機能は以前からあった）が溶け込んでいったのでしょうか。

富田は、理カフェに参加下さっていた音楽家の方が主催する音楽の例会に誘われました。音楽の例会だったのですが、音楽家の方々は「科学は信用できるものなのか」から切り込み始め、周りをもっと知っていくために、もっと多くの知識と方法論の習得が必要、という話に発展しました。この例会には高校生や中学生も参加していましたので、若い人への伝言の意味も込められていました。この例会の活動は、保育園での音楽会にまで発展しました。三角形構造でなく蜘蛛の巣構造だから、次にどういう発展をするかわからないし、どこにでも飛んで行ける、という可能性があるのでしょうか（再び図1参照）。

2009年夏、尾久土はたまたま看護師の知人から、最後にプラネタリウムに行きたかったという末期がんの患者さんが病棟に入院しているという話を耳にしました。「私が病室にパソコンとプロジェクターを持って宇宙の話をしにいくよ」と話の勢いで返事をしてしまっ

たあと、いったいどんな内容の話をしたらいいのだろうかと悩んでしまいました。それは、これまでの私の講演の経験では、何かの役に立つ話をしてきたからです。例えば、私たち天文コミュニティの活動を紹介し、応援してもらうとか、青少年の科学への興味を刺激し、理系の大学へ進学して欲しい・・・などです。ところが、ほとんど余命のない患者さんに対して、このような動機は当てはまるものはありませんでした。悩んだ末、「星の死と誕生」についてベッドの横に座って話をしました。話し終わったとき、患者さんは病気の苦しみをつかの間忘れて喜んでくれました。そのあと、体力が回復されると聴き、1ヶ月後、もう一度話しにいきました。その後、奇跡的に宣告された余命を大幅に超えて生きられました。最後は病気に勝つことはできませんでした。

この患者さんとの出会いのあと、釜ヶ崎の三角公園に立つ機会を得ました。そのときは迷うことなく、宇宙を見ること、宇宙を知ること、誰のためでもなく、一人ひとりの生活の質(QOL)の向上につながるはずだと確信しました。そして、おっちゃんたちの肩に手をまわして、いっしょに星空を見ることができたのでした。

### 3. まとめ

もともと天文教育普及活動は、資金集めや三角形構造維持のため（それを否定しませんし、その面が重要であることは間違いありません）というより、QOL向上を目指している面があります。蜘蛛の巣構造の中で話しあえる環境も、そのためのひとつでしょう。とはいえ、私たちはまだ十分に私たちの活動をうまく言葉にまとめることができていません。しっかり言葉にしたいのですが、もっと思索

---

---

を重ねて、いい言葉を見つけない、しかしまだまだ練りが足りない、というところです。

## 文 献

[1] 尾久土正己 (2010) 『宇宙とボランティア～2つの実践を通じて』、日本ボランティア学会 2009 年度学会誌、pp. 66-72.

[2] Akihiko Tomita (2009) “Astronomy Education at Nursery Schools,” 2009 International Conference of East-Asian Science Education (session: Learning Science in Informal Settings 2)

富田 晃彦

[3] 科学談笑喫茶室「理カフェ」：  
<http://ricafe2010.web.fc2.com/>

[4] まちなか交流スペース「みんなの学校」、和歌山市ぶらくり丁商店街内：  
<http://www.city.wakayama.wakayama.jp/machiokoshi/minnanogakkou/>

尾久土正己

[5] 天文学とプラネタリウム「天プラ」：  
<http://www.tenpla.net/>

[6] 黄華堂：<http://www.oukado.org/>

[7] 「星のソムリエ®」星空案内人® 資格認定制度：  
<http://ksirius.kj.yamagata-u.ac.jp/yao/ann/>

\* \* \* \* \*